

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ギリシア行漫筆 〈紀行〉
Author(s)	関本, 至
Citation	広大言語 , 8 : 63 - 70
Issue Date	1968-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046303
Right	
Relation	



ピヤン」という。つまり酔払いということで拍子抜けがしてしまった。それから各地で酔払いをかなりみつけたけれど、日本とくらべると大変おとなしいというのがその特徴である。大宇宙に浮いたような足どりでふわっと歩いている。大声でわめいたり、眼をすえて「ウーイ ウーイ」とうなったりする日本版とはたしかに「所かわれば品かわる」。

IV モスクワへ

イルクーツクより空路モスクワへ出発、途中オムスクで1時間給油、合計6時間半でモスクワドモチェードヴァ空航着。機中で隣り合わせた54才というパーヴェルさんはmanyに当る「ムノーゴ」を「ムノーホ」と発音する。あとでモスクワの連中にきいたり、発音辞典をみたりしても「ムノーゴ」である。シベリヤ方言であろう。この人から質問攻めにあったが、内容は物価のことが主だった。この時の印象をふくめて、ソ連では給与、住宅事情は私のような日本の一般庶民より悪まれているが消費物資とくに衣料が質量ともに貧弱であると思える。ワイシャツが4,000円以上するといった調子である。時速900軒、10,000米の高空を飛ぶ高性能のジェット機を下駄がわりに使う国がモータリゼーションといえば自転車にモーターをつけたカブの段階というちぐはぐさである。

モスクワ見学中、ナポレオンが「貞操を奪われた処女の如し」とかいったという雀が丘（現在レーニン丘）からモスクワ市街を俯瞰しながら、同じように見学中のピオネールの一団を引率する女子指導者の説明を立ち聞きしていると突然当の引率者から「東京タワーは何米か」とたずねられる。「エー333米」と答えると、我意を得たりとばかり、にっこりして「あのモスクワの新テレビ塔ができるまでは東京タワーが世界一でした。……」外国人を証人にしての説明に一層の拍車がかわったようであった。天に沖する宇宙飛行成功記念碑と、その下でガムやボールペンを欲しがる子供たちというちぐはぐさは、全体としては速いテンポでしかも懸命に生活水準向上努力中の1963年夏のソ連がもつ一面であった。

ギリシア行漫筆

関本 至

昨年8月23日に羽田を発って、トルコ、ギリシア、イタリア、フランス、ドイツ、イギリスの6ヶ国を歴訪し、11月22日丁度3月ぶりで帰国しました。トルコのことは簡単ながら前号に書きましたので、今回は主にギリシアでの幾つかの思い出を記すことにしましょう。

ギリシアではまず何と言っても現代ギリシアのなまの言語にできるだけ接したい、ついで大学を訪ねてギリシアの諸学者に会うこと、そしてギリシア語・ギリシア語史を具象的に理解するためにギリシア人の日常生活にふれたり、遺跡や博物館などをもできるだけ訪ねよう——とそんな盛り沢山のもくろみを心に抱いて出かけたのですが、ギリシア滞在わずか40日では、とてもとても心ゆくまでの収穫を得られるはずはありませんでした。しかしともかくその40日の間、毎日ほとんど無為にすごすことなく、時間と身体の許すかぎりあちこちととび廻って、多少とも見聞を広めることができたのは有難いことだったと思います。

外国へ出かけても、国内にいたと同じ最少限の必要生活というものがあります。睡眠はもとより、洗面、食事、入浴、それに洗濯といったようなことまで、これが存外時間もかかり、気も使わなくてはなりません。すると残る時間は知れたものです。もっとも食事はホテルでとるにせよ、外で食べるにせよ、食事そのもの、食べ物の名前、テーブルのしつらえ、すべて興味の対象であるわけですし、食堂のボーイ、部屋掃除の女中さん、郵便局員、運転手、そのほか買物をする店の店員、といった人々との応対などの一切が結局勉強になったというわけなのですが。

イギリス航空B&Aの清楚な小型ジェット旅客機でイスタンブールの空港を飛び立ったのが8月28日午前10時30分。機内での廻状には、高度7,300m、時速960km、所要時間55分とあり、10時55分にはレスボス島上空通過中とのアナウンスがあって、エーゲ海をそれぞれとびして、きっかり55分で11時25分アテネ南郊のエリニコン空港に着陸しました。入国手続きと税関検査はいと簡単にすみました。(但し横にいたトルコ人が税関吏にトランクをかき廻されているのを見て気の毒に思いましたが、聞くところではトルコ人の中には密輸をする者が間々あるらしいとのことですし、大体ギリシア人はトルコ人にはきびしく当るところがあるようです。それにひきかえ日本人にはきわめて寛湯だとの感じを受けました。)

空港よりバスでアテネの中心部にあるシンダグマ広場のエア・ターミナルへ(この広場に面して各航空会社の事務所がそれぞれ軒を並べているのですが、着いた時には無我夢中、それがシンダグマ広場であったとわかったのはあとになってからのことです——柑橘並木の樹蔭で野外喫茶を楽しむアテネ市民の憩いの広場です)、それからタクシーでアカデミア街のアカディモスという名のホテルへ向いました。乗ったタクシーの運転手が「あの車はトヨタだ」と前を走る車を指して教えてくれましたが、私を日本人だとすぐわかったのでしょう。ホテルに着いてフロントへ行き、英語で「今着いたのですが、日本から……」と言いま終らぬ中に、「ミスタ・セキモトですね」と待ってたと言わんばかりの応待です——セサロニキ大学のクリアラス教授が予約しておいて下さったお蔭です。

案内された6階の部屋の窓からは、アテネの象徴と言われるリカベトスとアクロポリスの二つの丘が望めます。ついに来たと言った感じです。ホテルの食堂で朝食をとったあと、さっそく街へ出てみました。大学の近くだからでもありませんか、本屋がやたらと目につきます。アテネにいる間、これらの本屋もずい分廻ったものです。大通りにはペリプテロン（フランス語のキオスクに当ります）という名の小さい真四角な売店が沢山並んでいます。その店の一つで新聞を求めようとすると、そこに並べてあるのに「ない」と言います。「ギリシア語の新聞で結構」と言う意味をギリシア語で言うと、意外そうな顔をして渡してくれました。「ボン（幾ら?）」ときくと「ミヤ・ミン」(one-half)との答、1ドラフマ半（つまり18円）というわけです。ブロークンなギリシア語も存外通じる、畳の上の水練もまんざら役に立たないこともないと思ったことでした。

さてアテネに着いて数日たってから、アテネ大学を訪ねました。地図で調べると、ホテルからほど近い目ぬきのヴェニゼロス通り（別名、大学通り）にアカデミアと大学と図書館とが並んでいることがわかりましたので、行ってみますと、そこには大学の本部があるだけで（絵葉書などには大学といえばその建物が出てきます）、哲学部（つまり文学部）は別のところだと教えられました。やはりホテルの近くなのですが、本部とは逆の方角で、バスの通る道路に面した新しいビルがそれだったのです。5階にある言語学教室を訪ね、主任のクルムリス教授にお会いし、言語学教室を一巡見せて頂きました。クルムリス教授は現代語の辞書編纂の仕事をやっておられます。5人の助手や研究生を使って、新聞雑誌の類に至るまで現代語の用例を丹念に集めるといふ仲々大がかりな仕事で、出来上がったカードを詰めた箱が資料室にぎっしり積み重ねてありました。またかねてからその名は知っていたギリシア国内の各種学術雑誌のバックナンバーが、当然のこととは言え、ずらりと並んだ書棚も羨しいものでした。その後、私は何回かその研究室を訪ね、助手の人たちとも親しくして貰い、あれこれの質問をしたり、本を貸して貰ったりしたのでした。

ギリシアを立つ数日前にその助手の一人の人の紹介で、たまたま研究室に来合わせていたアカデミアの辞書編纂員コンドソプロス博士と知り合い、アカデミアを見学できたのも仕合わせでした。それはリカベトスの丘の麓の閑静な場所にある、やはり新しい建物で、部長や所員たちに紹介され、ギリシア語歴史辞書編纂室（この辞書は広大の言語学研究室にもあり、第4巻まで来ていますが、そのあとがまだ出ていないことも確認できました）、ギリシア各地の民謡などを録音したテープやレコードを集めた部屋、郷土の踊りなどを撮ったフィルムの資料室なども見せて貰いました。民俗学的な研究が着実にこなわれているとの印象を強く受けたのでした。

アカデミアを辞去して外へ出たところの街路で遊んでいた女の子二人を写真にとりましたら「アコマ!アコマ!」(encore, encore「もう一枚」)とせがむので、さらに一二枚うつしたの

ですが、人なつっこいこれら少女たちのことも、アカデミア訪問と結びつけていつまでも忘れられぬ思い出となるでしょう。

アテネでは、ある日、北郊外にあるアルサキオン女子学園を訪問して授業参観をする機を得ました。学年始めで、高校、中学はまだ授業が始まっておらず、小学校の高学年の国語（ギリシア語）と英語の授業を見せて貰いました。いずれも女の先生で、国語の授業は先生の言う文章を生徒が書きとり、うち二人の生徒が黒板にそれを書き、それを教材にして音節の話をする授業でした。ところが黒板を見て私はオヤと思ったのです。

「今日、私たちの教室にはお客さんがあります。それは菊と桜の花の国、美しい日本からのお客さんです。この方の訪問は私たちにとって大きい喜びです。」

という意味のことが書かれてあるのです。前日から私の参観を聞かされていた先生が、わざわざそのような教材を用意してくれたのでしょう。何とうれしたことだろうと感激しました。そして「3音節の語にはどんなのがありますか」との先生の問題に、思わず私も生徒と一緒に手をあげて当ててもらったりしたのでした。

この参観はその学園の理事長とでもいったような仕事をしているヴァシラキス氏のお世話によるものです。ヴァシラキス氏は、先年日本に来られ、私も広島で会って一夕を共にしたことがあるのですが、セサロニキ大学のクリアラス教授の奥さんのイトコに当るという関係もあって、大変親切にしてくれ、クリアラス教授が紹介状を書いて下さった現代ギリシア作家との会見にも骨折って下さったのでした。また一夜はアテネ南郊の海浜（パレオン・ファリコン）の魚料理屋でバルブニャ（ほらの一種か）という名の土地の魚などを御馳走して下さい、別の夜はプラカ地区というアクロポリスに近い旧アテネの一種の飲み屋街へ案内して、お酒と歌と人いさぎに満ちた、それでいて一向に演廢的ではない、いかにもギリシア的な雰圍気を味わせて下さったのでした。それが2回とも夜の9時に迎えに来てくれるのです。ギリシアでは午後1時すぎから一般の商店は店を閉じて昼休みとなり、夕刻5時頃からまた店を開くため、はじめは買物をするのに大変不便を感じました。食べ物屋は3時すぎから6時か7時頃まで店を閉めます。そんなわけで一般の勤め人も8時か9時頃まで勤務し、そのあと食事ということになるのでしょう。大学の助手の人に借りた本を返すのも、夕刻なら7時以後に届けに来てくれといった調子です。

ギリシアでは食べもの店にもいろいろの種類があります。ほとんど純西欧風と言ってもいい料理を出すホテルの食堂は別として、街には、エスティアトリオン（レストラン）、タベルナ（taverna）、カフェニーオン（コーヒー店）、ザハロプラストイーオン（喫茶店）など種々あります。カフェニーオンとタベルナがギリシア的な店で、どんな田舎へ行ってもこの二種の店はあり、タベ

ルナはいわば大衆食堂（食堂が「食べるな」とはおかしいことですが）、カフェーオンはどろどろのコーヒーを飲みながら庶民（とくに老人たち）がだべったりトランプをしったりして時を過ごすところでは。

アテネは人口60万余、外港ピレウスなどをふくめての大アテネの人口は200万に近く、ギリシア全土の人口のほぼ4分の1がここに集中しています。狭い道に人とバスとがあふれ、雑踏と喧騒の町とも言えます。街で目につくものの一つは、ラヒアと言う一種の宝くじを売る人が中心部の街頭至るところに立っていることです。日本の宝くじとちがひ、隣り合った番号数枚が一等に当たる仕組みで、当たった一連札を買くと莫大な額のお金が入るというわけ、沢山の枚数を買わせる手段でしょう。「ラヒア！ ラヒア！」と大声で売っています。ある晩、ホテルの向いの映画館でギリシア映画を見たのですが、それは「父もの」とも言いますが、失踪した子供を探し歩く父親が出て来て、ある街角で息子らしい少年の後姿を見かけて駆けよると、その少年はこちらをふり向いて「ラヒア！」と呼びかける——つまり宝くじ売りの少年だった、という場面がありました。映画の中にそんなシーンを入れるほど、ラヒア売りはアテネの町の日常的な風物になっているわけです。

ギリシア北部の都会セサロニキ（人口25万）へ行ったのは9月6日でした。日本を発つ前から打合わせしてあったイスラエル留学中のT大学のS氏が4日にアテネに到着、その翌々日二人で北ギリシアの旅に出たのです。その日は朝5時半に起床、日本では滅多にそんな早起きはありませんが、ヨーロッパ旅行中には屢々早起きを余儀なくさせられました。そのため持参の小型眼覚し時計がずい分役に立ったものです。早い朝食をすませて、S氏と共にバス駅にタクシーでかけつけ（料金は9.5ドラフマ——すなわち約110円ですからほどほどの値でしょう。なおメートルの最低料金はたしか4.5ドラフマ＝55円だったと記憶します）、かまびすしいバス乗り場でもかくラミア行きのバスに乗りました。屋根に荷台があって、大きい荷物はそこに乗っけて行くのです。雨の中を、ほとんど樹木の見られないごつごつした岩山を卓窓に見ながら、坦々とした国道をまっしぐらに北行、11時にラミアという町に着、そこからローカルバスで逆戻りして古戦場テルモビレーを訪ねました。その昔（B.C. 480）スパルタ王レオニダスがペルシア軍の来襲を防いだが、部下の裏切りで背後をつかれ手兵300とともに全滅したという名高い古戦場です。後日詩人シモニダスが彼らの殉国を痛み、彼らに代って

「おお旅人よ、ラクダイモン（スパルタ）の国人たちに告げよ、彼らの言葉を守ってわれらここに横たわる」と]

の句を作ったことも有名です。かつては海と険しい山に挟まれた要塞の地であったのでしようが、

今は海から大分離れています。ラミアへ引返し、汽車でラリサという町に行き、夕刻になったのでそこで一泊しました。翌朝、午前中ラミアのアクロポリス跡を訪ねました。町の人にアクロポリスはどこかと聞いても知らんと言いますし、中にはアクロポリスはアテネにあるなどと言います。しかし実際にばどのポリスにもアクロポリスがあったし、今もその遺跡は残っているわけなのですが、町はずれのアクロポリス跡からは北の方に、神々が宮居したオリンポス山が見えるはずですが、かすんでわずかにそれとわかる程度、午後の汽車に乗り夕刻セサロニキに着きました。

アテネのホテルで、セサロニキの宿の予約を頼んだのですが、丁度セサロニキは恒例の国際見本市で宿は満員でどうしてもとれないから、向うに着いてからインフォメーション・オフィスあたりで頼んでみなさいということなので、まあ何とかなるだろうとやって来たのでした。それで駅の案内所に行きますと、やはりホテルはだめ、素人の家なら泊まれるとのことでそれを紹介してもらいことにしました。パバイエオリオス街16番地のMという人のところだということで教えられた通りバスでそこへ行きました。高層アパートの5階にあるMさんを訪ねると不在。そこへ近所の親切なおかみさんが二人来合わせて、すぐに戻るだろうからうちで待ってなさいというようなことで、下の階のその人の部屋で待たせて貰いました。置くそなけれ、日本のアパートと大差のない作りです。椅子をすすめ、例の濃いコーヒーを出してくれたり——しかしおかみさんは勿論ギリシア語以外は全く話せませんので、片言のギリシア語で子供の話をしたり、その写真を見せて貰ったり、生けである花の名をきいたりしているうちにマダムMが帰って来ました。フランス語の家庭教師で、フランス語もわかるので、この人とはギリシア語とフランス語のちゃんぽんで話しました。しかしフランス語だと思って聞いているといつの間にかギリシア語になっていたりして、ともかく大変なことです。夜おそく、国際見本市に勤めている主人が帰って来て、われわれのパスポートを見て警察への届け書を書くのですが、おそろしく悠長です。ギリシアではその四月にクーデターがあり、共産主義者への警戒がきびしく、とくに共産国に近い北ギリシアでは旅行者に目を光らせているといった事情があったようです。

翌日午前、セサロニキ大学にクリアラス教授を訪ねました。クリアラス先生はかねてからの文通によって尋知を得ていた仲、アテネのホテルをとっておいて下さったのもこの先生です。この日の訪問のことはアテネから手紙で連絡してあったのですがそれが遅れて着き、いわば突然の訪問になったのでしたが、「ようこそギリシアへ」と抱えるように部屋に請じ入れて下さって、私はああこれでギリシアへ来た目的の半ばは達成されたと思ったほどでした。旅はどうだったか、宿はどこか、そんなことなら大学で世話してあげたのに……といろいろ親切に言ってお下さって、研究室の図書を見せて下さり、学部長其他にも紹介してくれました。拙著「現代ギリシア語文法」の校正刷（初

校)をお見せしたところ、一晚預って下さってあちこち加筆の上、翌日その説明をして返して下さいののです。さらにその日の昼食をお宅に呼んで下さり、翌日の昼は海岸通りのホテルに呼んで下さるといふ接待でした。それに二度とも奥さんが一緒でしたが、この奥さんは英語の先生だとのことでした。(なおクリアラス先生は余り英語は得意でなく、私はギリシア語で難しい話ができるはずありませんので、大学では助手のカラヤンニ女史が、食事の時には先生の奥さんが通訳をして下さったのです。)

セサロニキには同行のS氏の知り合いの娘さんがギリシア人と結婚しているとのこと、二人でその人を訪ねました。その人のアドレスをたよりに幾らさがせどそれらしい家が見つかりません。そのうち数人のギリシア人が寄って来て、一緒にさがしてくれますが、仲々わからないのです。ついに電話番号簿でつきとめて、連絡がとれましたが、つまり同名の街が二つあって、別のところがさがしていたのです。それにしても一生懸命みんなで、ああでもないこうでもない調べ廻ってくれた見知らぬギリシア人たちの親切さも忘れられぬことです。

この日本女性というのは、東京のある女子大を出た人ですが、今の主人であるギリシア人とペンフレンドとして文通をしているうちに結婚の申込みを受け、このギリシア青年は渡航の費用をためて日本にやって来て、ついに目的を果たしてギリシアへ帰って来た——という面白いロマンスがあるのです。前年の夏結婚したばかりで、それまではギリシア語を一言も知らなかったというこの若い婦人が、今では電話での応対もできるほどギリシア語が達者になっています——女性の順応力というのか、ほんとと感心したことです。ただし、書いたものを読むのはまだそれほど得意ではないとのことでした。

この夫妻にもずい分世話になりました。セサロニキの町を案内して貰った上、二晩の夕食の御馳走にまでなり、それも車で郊外遠くまで出かけて珍しいギリシア料理の数々を饗応されたのです。奥さんは、主人とのお母さんと三人でアパートに住んでいるのですが、お母さんがいい人でとても仕合わせだと言ひ、息子が日本人女性を嫁にもらうと言って旅に出た時のおどろきと不安や、またそれまでのさまざまの生活の苦勞などについてのお母さんの話をいろいろ聞いてあげるんだなども話しました。またセサロニキにはほかに日本女性が三人ほどいるが、みんな戦前からの人で、中の一人はもう長く日本語を話したことがなかったと嬉し泣きしながら、ややたどたどしい関西弁で身の上話をしてくれたことなどを、この婦人もまた何か堰を切ったような調子で私たちに語ってくれたのでした。セサロニキをたつ朝、夫妻は駅まで見送ってくれました——私は「御兩人に幸あれ」と心に呟き、涙せんばかりの思いで車窓より別れの会釈をしたのでした。

セサロニキの町で訪ねたアクロポリス、数々の教会の建物、ホワイト・タワー、西郊外のアレク

サンドロス大王の旧都ペラの遺跡、帰りの汽車の窓から見たオリンポス山の威容など、印象に残るものはまだ数々あります。また本稿ではギリシアの二大都市での思い出ばかりを綴りましたが、アテネから日帰りで訪ねた幾つかの古蹟めぐり、エーゲ海の船旅、ペロポネソス南西部の一人旅の話などもあります。しかし紙数も予定を超えましたので一まずこれで打ち切り、またの機会に記したいと思います。

ギリシアの人たちは親切であった、*euxenos*（客もてなしのよい）と言われた古代ギリシア人の伝統は今日のギリシア人にも依然受けつがれている、と言う感じが強くしたのです。なお西欧の人たちはどうか、前号で西欧の人はどこか冷いところがあるとの或る人の感想をちょっと紹介しましたが、私のわずかばかりの体験では、西欧でも不愉快なめにはほとんど逢わなかったと言えます。しかし人なつっこさと言った点ではやはりギリシアが第一、ついでドイツだったでしょうか。心配したイギリスも存外悪くありませんでした。

——だがすべてきわめて短期間のささやかな体験からの管見にすぎません。

8月30日 機上の日記

手 島 稔 之

黄褐色のフィールドの上を、日の丸の首翼を振わせながら私たちの飛行機は飛び立った。

これでアメリカ本土とお別れた。私たちの前方には太平洋の海が果しくなく広がっている。真下には白いサンフランシスコの街々が見え、ゴールデンゲイトが、そこがどこであるかを私たちに知らせてくれる。今日、数時間のうちにはハワイのホノルルへ、ホノルルからさらに東京まで数時間。飛行機は高度9500メートル、時速900km/hで飛ぶJALのDC-8である。今、午前10時55分、しかしハワイの時間は午前8時前5分である。隣の席に座り合わせた大阪YのTさんが私に尋ねるにはこの研修旅行で特に何を得たか？というのである。しかし、思い出して、特にこれというものはない。むしろ言い換えれば何もかも……何もかも私たちの経験したもので、それが私たちにによって得られるものとなり得るのだから。

デンバーを27日に発ったあとコロラド州からユタ州、ネヴァダ州を経てカリフォルニア州へ出て来る。平坦な平原から、いくつもの丘々を越え広い高速道路を上下しながら最後の高い丘を登りつめると速くに白く光って海が広がる。遙るか遠くにサンフランシスコの街が見える。この瞬間もひとつの感激である。ついにサンフランシスコに着いた。サンフランシスコは私たちの旅程では最